

図書紹介

C. C. Webster & P. N. Wilson. *Agriculture in the Tropics*. London : Longmans, Green and Co. Ltd., 1966. ix + 488 p.

熱帯農業については、なんといっても、イギリス人が最も豊富な経験をもつ。

ここに紹介する「熱帯農業」の共著者のひとり C. C. Webster 博士は前マラヤゴム研究所長であるが、マラヤ以外、ケニア・西インド諸島・タンガニカにも勤務し、過去32年にわたって熱帯農業にとりくんでいる。もうひとりの共著者 P. N. Wilson は現在 Unilever の研究室に働いているが、過去13年、東アフリカの Makerere 大学および西インド諸島大学で熱帯畜産学を講じてきた。

イギリスの熱帯農業についての過去の業績を背景として、著者のこの現地研究にもとづく、熱帯農業の概説書が本書である。現在の日本の熱帯農業研究の水準にくらべ、はるかに高いものであることを、残念ながら認めないわけにゆかない。

本書は、熱帯農業の基礎的な諸条件を明らかにし、熱帯の作物栽培および家畜飼養改善のための、既知の農業技術研究の総括を目的としている。

したがって、その内容として、まず熱帯農業の自然的条件である気候（気候型・降水・湿度・気温・日照）、土壌（熱帯土壌調査と分類・丘陵地傾斜地低台地の土壌・沖積平地と低テラスの土壌、なおこの章だけは H. Bine 博士の執筆）および植生（主要植生形態）をとりあげる。つぎに社会的要因として、技術水準・社会構造・伝統と信仰・人口密度と分布・健康と栄養・土地制度と相続を考察する。

本論に入って、熱帯農業において、きわめて重要な問題である土壌および水保全が最初に考察される。つぎは、開墾・耕起および雑草駆除の章となる。これをうけて、一年性作物栽培における肥沃度維持の問題となる。これは3章にわかれ、移動（焼畑）耕作、移動耕作の改善形態、水稻生産なる永久的作付形態のそれぞれにおいて、地力維持方法が分析される。転じて、樹木および灌木作物、すなわち熱帯農業の重要部

門である樹園作物の考察となる。ついで熱帯農業の、もうひとつの部門である自然草地が自然草地の形態・放牧による利用の2章にわかって検討される。これに飼料作物の栽培と牧草地の章がつづく。最後は家畜飼養についてであって、熱帯家畜の種類、家畜の熱帯環境への適応、熱帯における家畜管理、熱帯における家畜改善の3章があてられる。

本書は、個別の作物や個別の家畜についての説明はそれぞれの専門書にゆずることにしている。（たとえば、これがその1冊である Tropical Agriculture Seriesにしても、ココヤシ、茶、米、熱帯内陸漁業、熱帯養蜂、ココア、熱帯畜産入門などの諸書の刊行を見る）。したがって、巻末に30ページにわたっての参考文献目録がつけられており、より詳細な研究への手引きとなっている。

わたくしは、本書は熱帯農業概論書として最もすぐれたもののひとつであると思う。もちろん、広く熱帯全般についての敘述であるだけに、東南アジア農業としては不十分であることはいうまでもない。しかし、東南アジアの農業を理解するために、ここに強調されているプリンスプルは、きわめて有効に役立つにちがいない。その意味で、東南アジア農業の関係者にも、ぜひとも一読をおすすめしたい。（本岡 武）

Nicholas Tarling. *Southeast Asia, Past and Present*. Melbourne : F.W. Cheshire, 1966. xvi + 334 p.

著者 Tarling 博士は、2年ばかり前に、京大東南アジア研究センターを訪れられた。そのときは、オーストラリアの University of Queensland の東南アジア史担当講師で、すでに、

British Policy in the Malay Peninsula and Archipelago, 1824-1871, 1957.

Anglo-Dutch Rivalry in the Malay World, 1780-1824, 1962.

Piracy and Politics in the Malay World, 1963.

などの、マレー世界の近代史の研究を発表されていた。

博士は、その後、ニュージーランドに移り、現在 University of Auckland の Associate Professor of History であるが、最近、東南アジア史概説としての本書を出版された。

オーストラリアおよびニュージーランドが、東南アジアにいだく関心は、ちかごろ、めざましい。両国がマレーシアをイギリスに代わって積極的に支援しようとする動きについては、私は本誌前号で、クアラルンプール会議出席の感想として述べたところである。また、この10月のジョンソン大統領のマニラ会議出席直前の、両国訪問によっても明らかであろう。

本書はこのような要請に応じて出版されたものである。東南アジア史概説として本書の特色をなすのは、その時代区分である。1760年をもって、転機とする。したがって、第1編は1760年までの東南アジアをとりあつかう。第2編は1760年から日本の南方作戦のはじまる1942年までの東南アジアとりあげる。この時代を、さらに、第1部の植民的統治構造の形成、第2部の民族主義と自治主義とに分ける。第3編は1942年以後の東南アジアを、国ごとに略述する。

本書のひとつの特徴は、東南アジアのなかに、インド共和国に属するアンダマン・ニコバル諸島を含ませていることである。たしかに東南アジア史を理解するためのおもしろい試みだ。

しかし、オーストラリアおよびニュージーランドの読者を対象としながら、両国と東南アジアとの関係について触れるところが少ない。もちろん、この関係が、歴史的にそれほどなかったといえ、それまでのことだ。しかし、少なくともインドネシアとオーストラリアとの関係は、戦後、はなはだ微妙なものであった。具体的にいうと、西イリアン帰属問題をめぐって、オーストラリアはインドネシアに心よくなかったのは事実である。また、インドネシア・マレーシア対決問題にたいし、オーストラリアのマレーシアへの陰に陽にの援助は忘れられてはならない。その意味で、本書は東南アジア史概説としては、きわめてまとまりのよいものであるが、とくにこのオーストラリア・ニュージーランドと東南アジアとの関係に興味をもつものとしては失望せざるをえない。著者が、近い将来、この視点からの研究を公刊されることを切望する。なぜなら、

それが東南アジアの将来を読みとるための、ひとつの鍵なのだから。 (本岡 武)

Robert J. Muscat. *Development Strategy in Thailand, A Study of Economic Growth*. New York: Frederick A. Prager, 1966. xvi + 310 p.

タイ経済の最近のめざましい発展は、低開発国のモデル・ケースとしても、注目されなければならない。わたくしは、本書はタイ経済発展を真正面からとりあつた出色の研究であると思う。

その理由は2つ。第1は著者の1957年から62年に至る5カ年のUSOM (United States Operation Mission of the International Cooperation Mission, 現在のThe Agency for International Development) のスタッフとしての実際の経験。第2は、それだけに、いかなる経済開発戦略が必要であるかとの、さしせまった要請。したがって、本書はきわめて現実的である。にもかかわらず、この国での、経済計画にたちいっての著者の経験は、かなりの体系的な思索を必要ならしめている。

本書の構成を紹介すると、第1章はタイ経済発展のこれまでのpatternをとりあつかう。この場合、Ingramの著作に教えられるところが多い。第2章から、かれの本格的な仕事となり、まず1953年以後のタイ経済の成長変化を概説する。第3章は農業発展の動態と題し、きわめてめざましい発展をとげている農業の諸様相、たとえば米作、畑作、市場機構、租税体系、技術変化などをとりあげる。第3章は工業部門。第5章が開発戦略の結論となる。

開発戦略としては、現在のタイのとっている方針に、だいたい全面的に賛成している。つまり、自由主義経済を基調として、必要なかぎり政府が干渉するとのそれである。わたくし自身、その大すじについては、ほぼ同感であるが、ただ、政府のはたしてきた役割についての、現実にもとづく批判の少ないのを、あるいは点のあますぎるのを遺憾に思う。

いろいろと興味ある点が多い。たとえば、タイ経済発展の要因として、中国人のタイ化をあげているのは、ひじょうに同感だ。しかし、タイ経済の今後の見とおしとして、若い政府のエリート層をあげている